

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：32720

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381098

研究課題名(和文) 幼保一体化施設における子どもの育ちを支える保育の質と構造に関する研究

研究課題名(英文) The Quality and Structure of ECEC in Nursery-Kindergarten Integrated Institution

研究代表者

高嶋 景子 (Takashima, Keiko)

田園調布学園大学・その他の研究科・准教授

研究者番号：90369463

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：幼保一体化施設における縦断的な参与観察を通して、保育時間や日数、入園時期等が異なる子どもたちが共に生活を営む「場」の持つ「重層性」が、子どもにとって周囲の人間関係や環境の多様性をもたらし、それぞれの子どもの自己発揮の場や参加の仕方を多様に保障していくことに繋がっていることが見えてきた。さらに、保育者にとっても、子ども理解や実践を振り返るための資源や契機が多様に埋め込まれた場であることがわかった。しかし、その資源や契機を有効に生かしていくためには、重層的な保育の場が有機的な繋がりを持ち、それぞれの場における子どもの姿を共有する園の体制や仕組みづくりが不可欠となってくることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Through participant observation in Nursery-Kindergarten Integrated Institution, we have revealed the following. Firstly, diversity of the environments and relationships surrounding the children are created by the multiplicity of the “field” made by a variety of children. Secondly, the diversity of the “field” made by a variety of children, supporting a self-exhibit and diverse participation of children. Third, those “field” engages teacher’s reflections and viewpoints for understanding children. However, in order to those “field” it becomes the resources of teachers, next 2 elements are the most important. (1) The relationship to talk about nursing. (2) The system and the environment to study each other and help each other in daily work.

研究分野：幼児教育学・保育学

キーワード：幼保一体化 保育の質 場の構造

1. 研究開始当初の背景

近年、我が国の保育制度はめまぐるしく変化しつつある。特に、少子化・核家族化等の子育て家庭を取り巻く環境の変化を背景に、親の就労の有無にかかわらず、次世代を担う全ての子どもの育ちと家庭の子育てを支える施設として2006年より開始された幼保一体型の保育施設である「認定こども園」は、2012年に成立した「子ども子育て関連3法」により、更なる拡充が図られていくことが決定され、2015年より施行された「子ども・子育て支援新制度」においても、保育の量的拡充のための大きな柱の一つとして位置付けられた。

しかし、その一方で、「認定こども園は、幼稚園、保育園という単一の制度から見れば、どのように教育、保育を組み立てていくかは、難しい応用問題」⁽¹⁾であるとの指摘もあるように、長時間保育を必要とする子どもと短時間保育を必要とする子どもが同じ施設に在籍し、生活を共にしていく上で、どのように一日の保育の流れや、それぞれの時間の保育内容を組み立てていけばいいか、多くの課題が存在していることも確かである。

子ども・子育て支援新制度において、幼保連携型認定こども園における3歳以上児(1号認定、2号認定)の全ての子どもを対象とした「標準的な教育時間」に提供されるものを「学校教育(幼児期の学校教育)とし、それに加えて、長時間保育を必要とする子ども(2号認定と1号認定の預かり保育)に対して提供されるものを「保育(児童福祉法に位置づけられる乳幼児を対象とした保育)」として位置付けられたことは、上記のような課題に対する対策の一環と考えることもできるが、子どもたちの生活は、それぞれの時間や場面が細切れに独立して存在しているものではなく、互いに密接な関係を持っており、そこでの育ちを捉え、支えていくためには、それぞれの時間や場面の連動性を視野に含め、一連の営みとして検討し、構築していく必要があると思われる。

また、従来の幼保一体化施設に関する研究は、制度自体が新しいこともあり、制度的な意義や運用上の課題に着目したものが多く見受けられていた。近年、ようやくカリキュラムや保育内容に関する研究も見られ始めたが、それらも、幼保一体化の取り組みを始めている諸外国の保育や独創的な保育実践を試みている特定の園の保育形態を研究対象としたものが多いのが実態であった。そのため、本研究では、実際に複数の幼保一体化施設における縦断的な参与観察を通して、子どもたちの側から、一人一人の子どもが経験している幼保一体化施設の生活を捉え、そこでの経験や育ちと、それらを支える保育の在りようを分析していくことを試みることにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼保一体化施設の持つ特徴を踏まえ、そこでの子どもの育ちを支える保育の質と構造を明らかにしていくことにある。そのため、全ての子どもが在園している「標準的な教育時間」に当たる時間とそれ以外の時間等、一日の中に存在する多様な保育場面を通して継続的な参与観察を行い、そこで見られる子どもの発達的変化を、その場を構成するさまざまな構成要素(そこに関与するあらゆる人々、物的環境、空間的・時間的條件等)を含んだ活動システム全体の変化過程として捉え、その連動性に着目しながら読み解いていくこととする。そして、それらの変化を生み出す可能性が埋め込まれた「場」の構造を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 認定こども園における子どもの育ちに関する縦断的研究

< 研究対象園 > (2園)

- ・幼保連携型認定こども園Y 幼保園(神奈川県横浜市)
- ・幼保連携型認定こども園M こども園(神奈川県川崎市)

< 研究期間 >

- ・2013年4月～2016年3月(3年間)

< 研究方法 >

- ・保育実践への継続的な参与観察
- ・保育後のビデオカンファレンス
- ・保育者へのヒアリング(非構造的インタビュー)

(2) 認定こども園における保育体制の工夫に関する調査

< 研究対象園 >

- ・東京都、福島県、秋田県、栃木県にある幼保連携型認定こども園(8園)

< 研究方法 >

- ・保育実践の視察
- ・保育者へのヒアリング(半構造的インタビュー)

4. 研究成果

(1) 子どもや保育者にとって多様な「場」の持つ意義とは

子どもにとって多様な保育場面・集団が存在することの意義

認定こども園の大きな特徴の一つに、先述したように保育時間や入園時期、登園日数などが異なる子どもたちが共に生活を営む場面であるため、一日の中に多様に異なる保育場面や集団が存在し、大小さまざまな共同体が

重層的に折り重なり合いながら、織り成されている場となっていることが挙げられる。

このように多様な保育場面や集団が存在することは、子どもたちにとって、その時々、その集団の規模やメンバー、物的・空間的環境や保育者等の変化に伴って、その活動や遊びが変容するだけでなく、それらに対する一人一人の子ども自身の「参加」の在りようにも変化が見られることが確認された。

幼稚園や保育所に比べて、より多様な人間関係や環境が存在していることによって、それぞれの子どもにとって、自分なりのかかわりやすい場や対象（人やモノ、活動）それらとのかかわり方を探るための範囲（幅）の広がり生まれ、多様な自己発揮の場や参加の仕方を発見していくことのできる可能性が広がっていると考えられる。（例：「標準的な教育時間」とされる時間のクラスにおいて、なかなか遊びの中で生まれる葛藤場面に耐えることができず、周囲の他児とのかかわりに難しさが見られていた男児が、人数の少なくなる午後の時間帯において、より規模の小さい集団を自ら形成し、その中で安定感をもって遊びを積み重ねていくことで、少しずつ多様な葛藤場面に自分なりの耐え方を見出していったプロセスも事例において観察されている。）

ただし、その一方で、保育時間や入園時期が共通する子ども同士で既存の関係に捉われやすくなってしまい、関係や参加の在りようの固定化が起こってくる危険性もあり、そこには、保育者のそのことへの気づきや配慮が求められることも確認された。

保育者にとって多様な保育場面・集団が存在することの意義

保育者にとっては、多様な保育時間や場面が存在することは、自身が保育を担当し、実践している場面以外の子どもの姿に出会ったり、そのような情報を得られる機会が増えるため、自分にとって「未知」の子どもの姿と出会うことで、子どもを多面的に理解していくための手掛かりとなったり、自分自身の子どもへの理解や援助を振り返り、新たな気づきを得ていく契機にも繋がっていることが見えてきた。ただし、そのような新たな気づきを得るためには、その資源ともなる「子どもの姿」を園内で共有し、可視化していくための様々な仕組みや工夫が必要とされることも確認された。

(2)保育の省察を生み出すための仕組みや工夫

多様な保育場面・時間における子どもの姿を共有するための工夫

多くの認定こども園では、保育時間（「標準的な教育時間」とそれ以外の時間等）に応じて、担当の保育者を配置しており、その時間帯によって保育者が入れ替わる体制を取っていた。そのため、それぞれの時間帯や集

団の中で子どもたちが見せる姿（遊びや人間関係等も含む）を保育者同士が共有していくための仕組みや工夫が必要とされており、各園で、様々な取り組みが行われていた。

園内で、子どもの姿、遊びや活動の見通し、今後の計画等について語り合い、それを共有していくために、職員会議の時間帯を工夫するだけでなく、各保育時間の子どもの姿を記録し、保育者の思いや意図を付記する共有ノートや、保育者間で見合うためのドキュメンテーションの作成等、会議の時間が取りにくい体制の中で、子どもの姿や保育の意図を共有していくためのツールの開発・工夫が見られた。それらのツールの活用を通して、個々の保育者が、子どもたちが遊びの中で味わっていることや経験していることをより丁寧に見ようとする姿勢の醸成に繋がっていると同時に、それによって、遊びの次の展開への期待や願いが生まれ、そのための環境構成や素材、援助などが異なる保育時間の担当者間で協働的に検討されていく姿も生まれていた。

登園日数の多様さを活用した保育体制の工夫

ある認定こども園では、夏季・冬季・春季等の短時間保育時の多くが登園しなくなる時期に、通常保育の担当の枠組みを超え（また、近接している同じ法人内の幼稚園と合同して）その期間限定の特別シフトを組み、園の所属や担当の枠組みを超えた混合グループを形成して保育を実施する試みが続いている。各グループで1週間ずつ午前・午後に分かれて保育を担当し、グループごとに、毎日保育後の振り返りと翌日の保育計画を再検討する時間も設けている。通常、学年やペアを組んでいない相手や他園（同法人であり基本理念は共通）の保育者と連携し、保育の展開や反省を行う機会は、各自の保育の枠組みや子どもの見方を振り返る契機ともなっており、毎年、そこからの気づきがその後の保育の変容に繋がったと実感している保育者の声が聴かれている。

保育者自身による自発的な共有

では、異なる保育場面や時間があることで、多様な他者とまなざしを共有したり、協働することの面白さや手応えを感じることに繋がっていく事例が見られ、その背景には、それを支える園全体の仕組みや工夫が存在していることが確認された。しかし、そこでの面白さや手応えが各保育者にとって実感を伴うものになってくると、予め設定されている会議や体制の中だけでなく、保育者自身が自発的に子どもの姿を共有したり、その育ちや保育の見通しを語り合う姿が生成されてくることも本研究を通して見えてきた。

その時々、各自が気になっている子どもや保育について、日常の中で、互いの保育時間や場面に足を運び伝え合おうとする保育

者自身による主体的な語り合いが起こってきたり、保育時間外に自主的な勉強会を立ち上げるような事例も確認されている。ただし、そのような保育者の自発的な共有も、その背景に、子どもの姿を共有し、語り合うことの面白さや手応えを感じられる機会やツールの保障があって生まれてきているものであり、園として、そのような仕組みや体制づくりはやはり不可欠であると考えられる。しかし、そのような取り組みを通して、それぞれの子どもの育ちや課題を共有していくことで、その子どもへの願い(保育の意図)の共有化にも繋がっていき、それが結果として、多様な保育場面や時間を行き来している子どもに対しても、それぞれの場面や時間において、同時多発的に共通した意図や願いを持った援助や環境構成が起こってくることに繋がると考えられる。さらには、そのような様々な場面やツールを活用し、多層的な保育の場における子どもの姿を共有し、援助を繋げていく試みが、実際の子どもの主体的に育ちを支え、さらには、保育者自身の変容を支えていることが明らかとなった。

多重的な構造を持つ幼保一体化施設だからこそ、子どもたちの生活や経験の連続性を考慮し、それを支えるための保育の在り方について新たな工夫が求められることになるが、子どもたちの豊かな育ちを支えるための幼保一体化施設ならではの可能性を探るためにも、その仕組みや在り方を探究していきたいと同時に、それを支える「場」の構造について、今後より精緻な分析を行っていきたいと考える。

<引用文献>

- (1)渡邊英則、展望 認定こども園の現状と課題、保育学研究、第52巻第1号、2014、139

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

松山洋平、幼保連携型認定こども園の教育・保育を支える保育者同士の対話のあり方に関する一考察 様々な園内会議・研修、対話場面を手掛かりとして、和泉短期大学研究紀要、査読有、第36号、2016、1-8

高嶋景子、幼保一体化施設における子どもの育ちを支える保育とは、発達、138号、2014、60-65

[学会発表](計4件)

高嶋景子・三谷大紀・安村清美・松山洋平、幼保一体化施設における子どもの育ちを支える保育の質と構造に関する一考察(3)、日本保育学会第69回大会、2016年5月8日、東京学芸大学(東京都小金井市)

松山洋平・安村清美・高嶋景子・三谷大紀、幼保一体化施設における子どもの育ちを支える保育の質と構造に関する一考察(4)、日本保育学会第69回大会、2016年5月8日、東京学芸大学(東京都小金井市)

高嶋景子・三谷大紀・松山洋平・安村清美、幼保一体化施設における子どもの育ちを支える保育の質と構造に関する一考察(1)、日本保育学会第67回大会、2014年5月18日、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

松山洋平・安村清美・高嶋景子・三谷大紀、幼保一体化施設における子どもの育ちを支える保育の質と構造に関する一考察(2)、日本保育学会第67回大会、2014年5月18日、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

高嶋 景子(TAKASHIMA, Keiko)
田園調布学園大学・その他の研究科・准教授
研究者番号：90369463

(2)研究分担者

安村 清美(YASUMURA, Kiyomi)
田園調布学園大学・その他の研究科・教授
研究者番号：00158007

松山 洋平(MATSUYAMA, Yohei)
和泉短期大学・その他の部局等・准教授
研究者番号：00586422

三谷 大紀(MITANI, Daiki)
関東学院大学・教育学部・講師
研究者番号：40458609